[研究ノート]

1920年代のマルロー

不可知論思想の萌芽

石川 典子

アンドレ・マルロー(1901–1976)は、晩年のインタビューや書簡のなかで、超越的なものに関する自らの思想的立場について、「不可知論者」であるとしばしば述べている[1]。「不可知論」とは、岩波書店の『思想・哲学事典』によるならば、「一般に人間が認識できるのは経験に基づいた事実だけであって、経験を超える究極の実在、絶対者、無限なる者、神といったものは認識することはできないとする立場」[2]のことをいう。不可知論という言葉自体は、1869年にイギリスの生物学者トマス・ヘンリー・ハクスリーが自らの立場を区別するために用いたのがはじめであるとされており、比較的新しい語であるということができる。ミリアム・スナンは、マルローがこの語を用いたのは、おそらく1943年に出版された『アルテンブルクの胡桃の木』の草稿がはじめてであると考えており[3]、不可知論とは、マルローの著述活動の中期から晩年にいたるまでの著述活動の背後にあった重要な概念であったとみてよいと思われる。とはいえ、一口に不可知論といっても、この語は「経験的事実を超えるものは存在しないと考える方向と、そうしたものは語り得ないが故に黙しているだけであるとする方向」[4]という二つの大きく異なる意味を併せ持つ語であり、マルローがどのような意味で用いたのかについては、十分注意する必要がある。残念ながら、マルローが自らの不可知論の立場を明確に定義することはなかったが、クロード・タンヌリーやミリアム・スナンといったマルローの不可知論に関する研究者らは、マルローの様々な発言を鑑みるに、マルローの不可知論とは、前者のような無神論的な方向ではなく、むしろ後者の立場に近いのではないかと考えている[5]。本稿では、以上のようなマルローの不可知論思想の萌芽を探ることを目的に、青年時代のマルロー、主に1920年代を取り上げ、時代との関わりのなかで培われたマルローの思想を素描してみたい。

*

ヨーロッパにおいて、1920年代とはどのような時代だったのだろうか。考え逃してはならないのが、1914年に始まり1918年に休戦した第一次世界大戦の影響である。第一次世界大戦は、しばしば言われているように、ヨーロッパに未曾有の被害をもたらした。それはフランスについていうならば、動員兵全体の18%が死傷、全人口中の28人に1人が死亡したという統計が如実に明らかにしている[6]。これほどまでに多くの犠牲者数を出した総力戦という過酷な状況、進歩の象徴であった科学の兵器使用などは、人類は無限に進歩するのだというような既存のオプティミスティックな価値観や、合理的精神の絶対性といったものを一変させてしまう出来事であった。1920年代ヨーロッパのあらゆる出来事は、このような第一次世界大戦の後遺症にどのように対処していこうとしたのかといった観点からとらえてみることができる。例えば、ダダという文学の運動が生まれてきたのは、直接的に、「世界大戦にゆきついたヨーロッパ文明への呪詛、ないしはそれからの観念的な脱出の試み」[7]からであったし、より方法的になったとはいえ、ダダの延長線上にあるシュルレアリスムの運動も、デカルト的な理性万能主義から人間の感性や想像力といったものを解放しようとする、大戦以前の価値観に反逆しようとした反理性主義の試みであった[8]。『快感原則の彼岸』(1920)が発表され、フロイト晩年のキータームである「死の欲動」という概念が表に出てきたり、『存在と時間』(1927)のなかで、ハイデガーが「死へと向かう現存在」についての思想を展開したりするのも、1920年代である。これらの思想を安易に大戦と結びつけてしまうのは危険なことではあるが[9]、この時代には確かに、人間の有限性についての洞察が深められていったということができるだろう[10]。1919年に締結されたヴェルサイユ条約の下での新たな体制は、イギリス・フランスの戦時債務からドイツの賠償金支払いまでアメリカの経済資本に多くを依存するという状況であり[11]、もはやヨーロッパの世界に対する優越性が失われたのだということを明確にしていった。シュペングラーの『西欧の没落』(1918)や、ヨーロッパは「アジア大陸の小さな岬の一つになってしまうのか?」[12]と憂いを投げかけたヴァレリーの『精神の危機』(1919)は、世界におけるこのようなヨーロッパの立ち位置の変化を早くから察知し、危機感を募らせていた著作である。

マルローが青年時代を過ごしたのは、まさにこのような時代であった。1901年に生まれ、10代の最も多感な時期に大戦を経験したマルローは、ダダやシュルレアリスムの周辺に顔を出し、19歳の時にはシュルレアリスム風の処女小説『紙の月』(1921)を著す。シュルレアリスムの反理性主義的な試みに接近しながらも、一方でシュペングラーの『西欧の没落』に大きな影響を受けていたマルローは、次第にアジアへと興味を向けていく。実際、1923年には「考古学の調査」のためにカンボジアに渡り、1925年には現地の植民地独立運動を支持するためにインドシナ半島へ再び上陸している。このような活動を経た後、マルローは『西欧の誘惑』(1926)と「ヨーロッパのある青春について」(1927)という二つの文明論を世に問うこととなる。

*

『西欧の誘惑』は、架空のフランス人A・Dと中国人・林による往復書簡形式の小説である。キリスト教への信仰が衰え、絶対的なものの価値が衰退し、何をよりどころにしてよいか分からずに不条理、ニヒリズムのなかで生きる西欧の青年A・Dが、人間それ自体に価値を認めず、一瞬一瞬のなかに永遠を見出していくという東洋の価値観に出会いながら、西欧文明の未来を憂いてゆくという内容の本書は、多くの研究者が指摘しているように、マルローにおけるニーチェの影響が色濃く反映されている[13]。しかし、本書で林の手紙に「神に続いて、人間も死んだのです」[14]と書きつけたマルローには、ニーチェとは異なる方向性を垣間みることができる。その後発表された「ヨーロッパのある青

春について」を読んでみると、それはより鮮明に見てとることができる。マルローは、以下のように述べている。

> 我々の目の前に残されているのは、現代の最高の精神により構築され、ニーチェの狂気に由来し、さらに神々の遺物によって飾り立てられた個人主義だけである。しかし、この個人主義の中に、我々は盲目の勝利者の姿しかみない[15]。

ニーチェの思想は、「神の死」を受けて人間そのものの力へと目を向けさせる。しかしそのような人間の姿は、マルローにとっては、神という精神的な支柱を失った個人の、孤独で不毛にもみえる闘いに過ぎない。神に続いて死んだあとの人間が、どのようにして生きていくのか。完全に把握することができるはずのない「自我」を追い求めるあまり不条理の暗闇にはまり込んでしまった人間は、どのようにして生きていけばいいのか。このように疑問を投げかけるマルローの問いは、キリスト教の神ではないが、それでも何か「個」を超えて絶対的に価値があると呼ぶことができるものを希求せずにはいられないひとりの人間の姿を露わにしている。そしてマルローは、その後レジスタンス参加にいたるまで、政治参加や戦争参加といった「行動」のなかに、自らその解答を求めていくことになる。

*

本稿では、マルローが晩年に不可知論思想を抱くにいたった経緯において重要だと思われる、彼の青年期の思考について、第一次世界大戦後のヨーロッパを取り巻く状況を概観しながら素描を試みた。あらゆる既存の価値観が揺らぎ始めていた大戦後のヨーロッパのなかにありながら、マルローは何か絶対的な価値と呼ぶことができるものを打ち立てようと、自ら歩みを進めていた。青年期のマルローにおいては、それは神というはっきりとした存在ではなかったが、有限な世界を超えた領域に属する何かであったということは確かである。『西欧の誘惑』や「ヨーロッパのある青春について」の内容には、より踏み込んで論じる必要があるし、マルローとアクション・フランセーズ周辺との関係など、本稿では論じきれなかった部分も多いが、それらの点は次稿への課題として本稿を締めることとしたい。

---

1 Cf. 竹本忠雄『マルローとの対話』人文書院、1996年、78ページ。マルロー自身による不可知論への言及については、Myriam Sunnen, *Malraux et le christianisme,* Paris, Honoré Champion, « Littérature de notre siècle », 2009, p. 16–22に詳しい。

2 廣松渉他編『思想・哲学事典』岩波書店、1998年、1366ページ。

3 Myriam Sunnen, *op. cit.,* p. 16.

4 廣松渉他編、前掲書、1366ページ。

5 Cf. Claude Tannery, *Malraux, l'agnostique absolu, ou La métamorphose comme loi du monde,* Paris, Gallimard, 1985 et Myriam Sunnen, *op. cit.*

6 柴田三千雄他編『フランス史』第3巻、山川出版社、1995年、244ページ。

7 山口俊章『フランス1920年代』中公新書、1978年、50ページ。

8 Cf. 同書、65–66ページ。

9 Cf. Todd Dufresne, *Tales from the Freudian crypt,* Stanford, Stanford University Press, 2000, p. 27–43(『〈死の欲動〉と現代思想』遠藤不比人訳、みすず書房、2010年、71–99ページ).

10 Cf. 西園昌久監修『現代フロイト読本』第2巻、みすず書房、2008年、504–518ページ。

11 Cf. 柴田三千雄他編、前掲書、249–258ページ。

12 Paul Valéry, « La crise de l'esprit », *Œuvres,* édition établie et annotée par Jean Hytier, Paris, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », t. I, 1957, p. 995(『精神の危機』恒川邦夫訳、岩波文庫、2010年、20ページ).

13 Cf. Françoise Doyen, « Malraux et Nietzche », *André Malraux,* textes dirigé par Michel Cazenave, Paris, Editions de l'Herne, « L'Herne », 1982, p. 403–414 ; Nicholas Hewitt, « Malraux et Nietzche : un rapport qu'il faut nuancer », *Influences et affinités,* textes réunis par Walter G. Langlois, Paris, Lettres modernes, « La revue des lettres modernes ; André Malraux », vol. III, 1975, p. 135–160.

14 André Malraux, *La tentation de l'Occident, Œuvres complètes,* volume publié sous la direction de Pierre Brunel, Paris, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », t. I, 1989, p. 100.

15 André Malraux, « D'une jeunesse européenne », *Essais,* volume publié sous la direction de Jean-Yves Tadié, Paris, Gallimard, « Bibliothèque de la pléiade », t. VI, 2010, p. 200.